虹色ペンシル

蒼井林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
虹色ペンシル

【Ｎコード】
Ｎ５７２６Ｘ

【作者名】
蒼井林檎

【あらすじ】
人と関わる事が苦手で、一人で絵を描いてばかりいる中学二年生の少年は、たまたま席替えで隣になった少女と接していくうちに少しずつその心を開いていく。

1枚目

まるで、ぬり絵をするかのように、僕の世界に色が溢れかえった。それまでは何もかもが白黒で、味気のない世界。薄っぺらい紙に書かれた、薄っぺらい世界。そんな僕の世界を鮮烈に、そして唐突に色をぬったのが、彼女だった。

クラスの人からは委員長と呼ばれていたその子は、すごく明るくて何をするにも輝いていた。最初は特に気に留めていたわけではない。というよりも、いつも一人でいた僕は他人に興味が無かったので、彼女のことを全く知らなかったくらいだ。一人でいることが嫌だった訳でもないし、負い目に感じることもなかった。決してイジメにあっていたという訳でもない。友達が欲しいとも思わなかったし、そもそも人間関係という存在を面倒だと考えていたからだ。

その時、僕は中学二年生に進級したばかりだった。四月は、桜の花びらがひらひらと音も無く散っていくように、事務的に物事が進んでいった。最初のホームルームでは一人一人簡単に自己紹介をした後に、担任から、「新一年生を迎えて後輩から見られる立場になるという自覚を持って生活していけ」とか、「再来年には受験を控えているのでこれからは更に真剣に勉学に励め」などといかにも教師然としたことをくどくどと説教をされたのをぼんやりと覚えている。

それから四月はあっという間に終わり、五月になった。ゴールデンウィークが何事もなく過ぎ去ったある日の帰りのホームルームで、このクラスになって初めての席替えがやってきた。席替えとなると誰しもが、好きな異性の近くになれるようにとドキドキしたり、窓際後方の席を陣取ろうと息巻いたりするものだ。かくいう自分も多

少なりともドキドキしていた。好きな異性はいなかったのだが、出来る限り教壇から遠くて端の席になりたいと思っていた。理由は簡単。とにかく目立ちたくなかった、という一言に尽きる。

問題の席替え方法は、よくありがちなくじ引きだった。黒板には座席を表すマスが引かれていてそのマスの中にランダムに数字が書き込まれ、そして紙にもそれぞれ数字が刻まれており、それと照らし合わせて席を決めるのだ。これはもう運に任せるしかない。半ば諦めつつ自分の引く順番を待った。

大きめな缶に小さく折りたたまれた紙が入っており、出席番号順にくじを引いて少しずつその数を減らしていった。

そしてついに僕の番が回って来た。先に引いた生徒の中にはガッツポーズをしてはしゃいでいる奴や、頭を抱えて悔しがる奴もいた。

若干緊張してはいたが、それを顔に出さずこれだと思う小さな紙を手に取った。そしてゆっくりと開く。

《　9　》

果たしてこれはどこの席なのだろうか。せめて最前列でなければいいと少し妥協しながら恐る恐る黒板に目をやった。

黒板の数字を見て思わず声を上げそうになった。なんと僕が引いた《9》番は幸運にも窓際の一番後ろだったのだ。声を出して喜ぶのも嫌味に取られるだろうと思って、この興奮をギリギリ胸の内に押し留め、マスに数字を書き込んだ誰かに心の中でありがとうと叫んだ。

全員が引き終わると早速席の移動になった。机ごと新しい席まで移動するので、教室内には机や椅子を引きずる音が響いた。おそらく一つ下の階にいる三年生はさぞうるさく感じたことだろう。

最高の席を我がものにし、平穏な生活を手に入れたことに満足していると、最大の懸念点である右隣の女子がやってきた。その女子は一年生の時は違うクラスだったようで話したことは一度としてなかった。自己紹介は先月していたが、彼女の名前は覚えていなかった。僕としてはこちらに関わってこなければそれでいいと思った。

彼女は何か言いたげな顔をしてこちらを見ているような気がしたが、それを無視して窓の外に目を向けた。五月にしては少し肌寒い風が窓を打ちつけ、空には灰色の雲が広がっていた。

次の日から僕は予想通り、誰にも邪魔されない席で好きなように生活を送っていた。淡々と一日を過ごし、また明日も淡々と過ごしていく。それで良いと思ったし、とくに目標があるわけでもなかった。部活にも入っておらず、意味も無くここに座っているという感じだった。将来に向けて今から頑張っておけば、きっといつか自分のためになる、夢を目指すなら早い方がいいぞ、と担任は口癖のように言っているが、将来のことなんてまだ何もわからないし、自分の人生を今すぐ決めろと言われても無理な相談だ。

そんな風に、適当に毎日を過ごしていた僕だったが、好きなことはあった。それは絵を描くことだった。目の前にあるものを描く時もあれば、動物などを頭の中で想像しながら描く時もあった。安い鉛筆で幾つも幾つも描いた。できるだけ本物のように、繊細に、忠実に。

彼女と初めて言葉を交わしたのも、絵を描いている時だった。頭

の禿げた独身教師のつまらない歴史の授業を聞き流しながら、窓から見える外の景色をぼんやりと描いていると、授業中だと言うのに声を掛けてきたのだ。ノートに描かれている絵を覗き見たのだろう、一言「絵、上手なんだね」とごく小さな声で彼女は言った。その時はたったそれだけだった。だが、僕はその言葉を一生忘れることはないだろう。そのたった一言から僕の人生は変わったのだ。いや、始まったと言うべきかもしれない。

僕は、突然の出来事になんて返事をすればいいのかわからず、ただ曖昧に「お、おう」としか言えなかった。今になって思えば、どうしてその時に気の利いたセリフの一つや二つ言うことが出来なかったのかと後悔している。第一印象が悪いと、なかなかその印象は拭えないというのに。ありがとうさえ言えないとは本当に情けない。

その日を境に、クラスの人気者である委員長は、何かと僕の描く絵について聞いてくるようになった。初めは、友達のいない僕のことを同情して話しかけているのではないか？と疑っていたのだが、どうやら彼女にはそんなつもりは全くないようだった。僕は面倒そうに素っ気なく答えていたのだが、それにもめげずに彼女はしつこく聞いて来た。「この絵は何？」「もしかしてこれは学校で飼っているウサギ？」

何度も何度も、彼女は聞いて来た。それはおそらく単純に絵について興味があったのだと思う。何故かと言うと、彼女も自分の描いた絵を僕に見せてくれたからだ。彼女の描く絵はとても可愛らしくて、ファンシーな絵だった。小さなころに絵本で見たことのあるような、そんな絵だ。僕はいかに本物を忠実に再現できるかに重点を置いていたので、どうしてそのような絵を描くことができるのか不思議だった。

2枚目

僕が絵を描き始めたのは、まだ十歳にも満たない時からだ。幼稚園の時にも描いていたと言えば描いていたのだが、所詮それはただの子どものお絵描きとしか言えない。

きっかけは小学四年生の時に、たまたまテレビでとある画家のドキュメンタリー番組を見た時だった。鉛筆一本、しかも数十分間見ただけの風景を記憶し、自室でその風景の絵を描くという画家。緻密で繊細、だが時に豪快なその鉛筆捌きは、今でも鮮明に思い出せる。それはまさしく天才だった。神から与えられた才能を見事に開花させたその人は一躍有名になったのだ。

だが神は彼に画家としての才能だけではなく、同時に試練をも課していた。彼は脳に障害を持っていたのだ。一般的な生活を送ることは難しい。誰かの手助けが無くては、過酷な人生だったという。

しかし、その才能を認められたおかげで彼は今、世界的に有名な画家として活躍している。そんな彼に僕は魅了された。どうしてそんなリアルに絵を描くことができるのか。その憧憬の気持ちはすぐに行動として現れた。

僕はその時たった九年間という短い人生の中であそこまで何かに没頭したことはなかった。もしかしたら僕の一生の中でも、そうだと言えるかもしれない。

翌日から学校にも行かず、朝から晩まで絵を描いた。部屋の押し入れから動物図鑑を引っ張り出して最初のページから最後のページ

まで、全部を真似て描いていった。他にも、テレビに映っていた有名な場所や、アルバムの中にある思い出の写真を何枚も何枚も描いた。

初めは母親にどうしたの？学校で何かあったの？と心配されたが、ほとんど無視するように誤魔化した。毎日毎日、右手の指が動かなくなるまで描きまくった。自分が納得するまで辞めるつもりはなかった。そして学校に行かなくなってからちょうど一週間が経った日、自分が心から納得のいく渾身の絵を、一枚完成させた。

その絵とは、腕の中で泣いている赤ん坊の時の僕を、優しく抱いている母親の姿だった。その絵を持ってキッチンにいる母に見せに行った。女手一つで僕を育ててくれた母はその絵を見て、何も言わずに僕を抱きしめてくれた。そして僕の耳元でポツリと「ごめんね、ありがとう」と言った。その目には涙が溢れていた。

その時の母の気持ちは、今でもはっきりとはわからない。僕自身、母にはものすごく感謝していたし大好きだった。どうして母はあの時僕に謝ったのか、そしてありがとうと言ったのか。それは何回聞いても少し笑ってはぐらかすだけで、とうとう教えてはくれなかった。

しばらくして母は、その絵を僕に内緒で市のコンクールに出品していた。そんなことも知らず、今まで通り学校に通っていた僕は、最優秀賞を受賞したと担任から聞かされた時は頭の上に疑問符を浮かべることしかできなかった。もちろん母は受賞したことを喜んでくれたし、そんな風に喜ぶ母を見るのは嬉しかった。

だがそれから絵を描くことが好きにはなったのだが、賞に選ばれた絵のような納得のいく絵を描くことはできなかった。

あれから数年間、僕はだらだらと絵を描き続けてきた。飽きっぽい僕がこんなにも一つのことを続けているのには自分でも驚いていたのだが、徐々に絵を描くことを楽しく感じなくなってしまった。

そんな僕だったが、中学二年生の五月になってからはそれまで以上に絵を描くペースが上がっていった。そしてその完成度も次第に良くなっていった。その時の僕は何でだろう、と気にはしていたが、その理由を追求することはなかった。後になって考えたら答えはたった一つしかないのだが。

隣に座っている委員長と親しく絵の話をできるようになってきたのは、席替えをした次の週からだった。当時の僕は、どうして委員長にはこんなに遠慮せずに話せるようになったのかはわからなかった。おそらく、彼女が最初に僕の絵を褒めてくれたからかもしれない。だが理由なんて最早どうでも良くなっていた。

その頃の空は、それは見事な五月晴れが続き、僕の心の中も雲ひとつない晴天だった。学校で委員長と絵について語り合うのはすごく楽しくなっていた。

自分が描いた絵を彼女に見せる。そして彼女はそれを手放しで褒めてくれる。逆に彼女が描いた絵を僕が見て感想を述べる。他人から見たらごく平凡かもしれないが、僕にとってはとても特別な、満ち足りた生活を送っていた。

ある時、彼女が四枚の絵を見せてくれた。

一枚目は、中央でカメが俯いて泣いている絵。もちろんカメは可

愛いらしく描かれている。後方にはカメの様子を窺っているウサギがいた。こちらも勿論可愛いイラストだ。

二枚目、ウサギがカメに何やら話しかけている。それに答える様にカメは振り向いて返事をしているようだ。

三枚目では、カメの表情が明るくなって会話をしている。二匹とも笑顔だった。

最後の四枚目では、二匹が仲良く手を繋いで歩いて行く後姿だった。

最初にこれを見た時はいまいち彼女の意図が読めなかった。セリフも無く、本当にただの四枚の絵だった。僕が顔を顰めて彼女の顔をチラチラと見ても、何も言わず笑顔で僕の感想を待っているだけだった。

仕方がないので、僕は思うままに四枚の絵の感想を述べた。

このカメは一人ぼっちで、寂しくて泣いていた。そこにウサギがやってきて、友達になろうと言った。カメは嬉しくて泣くのをやめた。そして一緒に手を繋いで家に帰った。

自分でもありきたりだと思ったが、一度そう考えてしまうとなかなか他の考えは生まれてこなかった。そんなありきたりな感想を真剣に聞いていた彼女は、何度か頷いて「なるほどねぇ」と言った。

僕は答えが気になって聞いてみたが、不敵に笑って「それも正解だよ」と言うだけだった。僕は訳が分からなくて何度もその絵を見た。何度見ても、僕の頭の中にはさっきと同じことしか思い浮かば

なかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5726x/

虹色ペンシル

2011年10月19日02時08分発行